著。大正十三年十一月七日『読売新聞』によれば、会場は日本人倶楽部で、結城素明、鈴木秀雄、大久保作次郎、藤田嗣治、矢崎千代治、田中保、清水登之、三宅克己をはじめ、黒田を知らぬ者までが多数集まり、さまざまの追懐談が繰広げられた。三宅はそのなかから藤田嗣治の話と矢崎千代治の白馬会時代の話を紹介しているが、ここには前者のみを転載する。

私は美術學校に在學の時から黒田先生には特別に御厄介になつて居ました。パリに參つた後も、此方にも先生に能く似たフランス人が居るのでさう云ふ人を見ると、先生に御目に懸つた様に思ひました。それで日本に居た時、最初私達は皆先生の描かれる様な畫を描かねば惡いものと心得、專心努力して見ました。然し迚も先生の様な氣持の畫は出來なかつた。

ある時平河町の先生の御宅に罷り出て、先生の御作畫を親しく拜見に行きました。處が美しい御庭を見ると、恰度先生の畫と同様な白百合の花などが咲亂れて居る。そこで私は其時深く考へました。先生の様な繪は畢竟先生の様な境遇にあつてこそ出來るので、その時私達の様な、安下宿の二階などにくすぶつて居る者達には及びも付かぬ處のものである事を悟りました。で私達はそれが惡くても、矢張自分の感ずる様な氣持の畫を製作すれば可いので、無理に先生の眞似をしなくても良いと氣が付きました。

それから先生には何とも相濟まぬと思ひながら自分の感ずる儘、勝手な自分の畫を描きました。其御蔭で二三回出品を試みました文展出品畫は、皆はねられました。其後パリに來てもう十年にもなりますが、私の畫は先生の畫風とは益々離れて來ました。それから先生は何時も云はれたことだが、黒い色は決して使用してはいけない。黒は最も禁物だと云はれましたが、時代の變遷は恐ろしいもので、もう今日そんな事を云つて居る時代では無くなつて、實は今その黒の御蔭でめしを喰つて居る様な始末です

昭和五年に至り黒田の遺言に基づいて、その遺産の三分の一を以て黒田記念館・美術研究所が開設された(350・476頁参照)。

⑦ 田辺孝次の在外研究

大正十三年九月二十七日、助教授田辺孝次は文部省より工芸史研究のため満二年間フランス、イギリス、アメリカ合衆国在留を命ぜられた。

田辺は明治二十三年四月十一日石川県金沢市に生まれ、同県立工業学校窯業科を卒業後本校彫刻科に入学、大正二年に卒業した。翌三年九月『美術週報』編集主任(同四年十月辞任)、同四年三月水谷鉄也と駒込彫塑研究所を設立、同六年三月『伊太利亜彫刻史』編著、同年四月審美書院に入社し『美術之日本』の編集に従事(同年八月辞任)、同七年十月精芸合資会社を創立、同年十一月本校美術史研究室助手となった。大正四年十二月以降は軍籍にあり、同九年三月には陸軍歩兵少尉となった。同八年には本校助教授となり、「体操」授業を担任し、教務掛と美術史研究室勤務を兼ね、大村西崖教授に師事して同十年五月以降は「東洋彫刻史」授業を分担したが、彼は工芸部と関わりが深く、同十年二月以降は図案科第一部、

金工科、鋳造科、漆工科の予備科理事をつとめ、また、同十二年十一月以降は工芸部第一学年理事となり、自らも工芸史研究を志した。同十三年十二月日本工芸協会創立の際は主事に推されている。田辺の留学について新聞は次のように報道した。

旅券を前に

工藝史研究のかどでに際して抱負の一端をかたる田邊孝次君美術學校助教授田邊孝次君は文部留學生として來月廿日横濱解纜の諏訪丸で二ヶ年間歐米見學をすることとなつた。氏の研究科目は「工藝史」であつて主としてフランスに滞在研究する筈である。因に美術學校卒業生（氏は彫刻科出身）にして學究方面の留學生は氏を以て最初とするものであつて大に美校の爲めに氣を吐いてよい。氏は語る『東洋方面の工藝史は之まで正木校長が講座を持つて居られたが、工藝問題の盛になりつゝある今日、更に歐米の工藝品に對しても研究する必要を感じた爲めに私が行くことになつたのだと思ふ。途中エジプトに寄つて古代の工藝品を研究し後フランスに行くことにした。巴里では丁度明年四月から萬國工藝美術裝飾博覽會が開催されるから非常に好都合である。尚ほ私は前田侯爵の紹介で巴里の家庭の人となつて深くパリジャンの嗜好、實用方面をも研究することにしてゐる。その間英、伊、等をも見學、米國を經て大正十六年四五月頃歸朝の豫定である』と。氏は既に大村西崖氏に師事して東洋方面の研究は五ヶ年ばかりやり今回の歐米留學によつて西洋方面の研究も出來るわけで歸朝後は新に「工藝史」の一講座を擔任することになつてゐる。

（大正十三年十月二十七日『読売新聞』）

田辺は大正十三年十一月二十二日に出発。追ってイタリアも在留国に加えられた。彼は本校校友会文芸部監督や月報編集発行代表者を長くつとめていた関係上、滞欧中の消息や論説が月報に掲載されており、足跡を辿ることができる。論説の題目は次のとおりである。

仏蘭西の美的教育に就き（一、初等学校）　第二十四巻第二号
セーブル国立製磁所を見る　同第四号
千九百二十五年巴里万国装飾美術工芸博覧会に於ける工芸構想の主潮（文部大臣へ提出の報告書）　第二十五巻第一号
同（続き）　同第二号

帰国は昭和二年一月十七日で、直ちに復職し、同年四月より「工芸史」「東洋彫刻史」「東洋美術史」授業担当となった。同十一年東邦美術協会発行の田辺著『巴里から葛飾へ』には上記の留学中の事柄が詳しく記されている。

⑧ 正木直彦校長の支那旅行

正木直彦は大正十三年十二月十九日、外務省対支文化事務局主催南支旅行団（文部省直轄学校教授二名、生徒二十名）の団長として東京を出発した。正木不在中の校長代理には高村光雲が任命された。

この旅行については正木の「南支那旅行談」（大正十四年一月三十日国華倶楽部総会における講演の筆記。『東京美術学校校友会月報』第二十